文　化　第53巻　第3・4号 —秋・冬—
（平成２年３月）抜刷

普曜経の研究（下）

岡　野　　潔

普曜経の研究（下）

岡　野　　潔

0　問題の所在

先行する論文によって，私は Lalitavistara を層に分離した。[1] その後になされるべきであるのは，各層の性格特徴をまとめることと，その成立過程を考察することであろう。この（下）の論文では，その２つを問題としたい。まず原形について考察し，それから付加部分の成立とその性格を考察しよう。

従来普曜と方広とＬＶの３本をどのように位置せしめるかが，学者の論議の的であった。平井宥慶氏は普曜→ＬＶ→方広の順序を，外薗幸一氏は普曜→方広→ＬＶの順序を，考えられた。[2] 私は全体の原形部分と付加部分を検討することによって，基本的には平井氏の説が正しく，しかし正確には，これらの系統の形成は四段階でなされたとの結論に至った。一つ一つの付加部分の性質を明らかにして，この仮説を提出したいと思う。

1　原形の成立

1・1　原形の背後にある理念

ＬＶは仏伝であり，かつ大乗経典である。仏伝は大乗以前にすでに部派において形成されていたが，経ではなく，律の一部に入れられてきた。経とは哲学的真理を語るものであるが，律は戒律およびその因縁譚を語るものである。仏伝は因縁譚の一種とみなされ，律蔵に入れられた。しかし仏陀信仰の高まりとともに，そのような分類は揺らぎはじめる。そして，大乗の興起の中で成立し

(1)　「普曜経の研究（上）」『東北印度学宗教学会　論集』第14号 pp.108-93; 「(中)」第15号 pp.104-91。

(2)　平井宥慶「普曜経の変容」印佛研18－１ p.170；外薗幸一「Lalitavistara と方広大荘厳経」『日本佛教学会年報』第43号 p.20,35。

た仏伝ＬＶは仏伝でありながら，大乗経と主張する。ここで仏伝がもはや仏伝以上のもの，仏伝を越えた何かを求めはじめているように思う。ＬＶ原形の根本理念としてこの点が最も注目される。

Lalitavistara という経名は大変不思議な名前であり，訳すると「遊戯の詳細な記録」という意味になる。lalita（遊戯）という言葉は vikrīḍita（戯れ）という語と同義に経の中に用いられており，「遊戯」の意味で，世界を超えた菩薩の「自由自在さ」を表わす。[1] 魔軍を滅ぼす菩薩の英雄的な行為が「遊戯」なのであり，菩薩の生じさせた奇跡が「遊戯」なのであり，成道が「遊戯」である。p. 300 では降魔をさして「獅子の遊戯（siṃha-vikrīḍita）」といい，また p. 356 でも「（菩薩たちは）悪魔たちのかの大いなる攻撃と，善逝のかくも優美なる遊戯を見て（dṛṣṭvā ca tāṃ namucināṃ mahatīṃ avasthāṃ, vikrīḍitāṃ ca sugatasya tathā salīḍaṃ）」という。p. 357 では成道の姿が「これも人獅子の菩提座における遊戯である（idam api narasiṃhe krīḍitaṃ bodhimaṇḍe）」と述べられ，p. 438 ではＬＶ自身をさして「菩薩の遊戯（bodhisattva-vikrīḍita）」と言い替えている。

ＬＶの主題は降誕・出家・降魔・成道・転法論であるが，それらはすべて菩薩の演ずる遊戯の１つにすぎず，仏の生涯全部が遊戯とみなされているわけであろう。ＬＶの背後には釈尊を応身・変化身とみなす考えが流れていると思われる。ＬＶの全体にわたって「世間への随順（loka-anuVRT）」という言葉がくりかえし述べられるが，[2] この語が仏を出世間（lokottara）とする思想と表裏一体であることは説出世部の仏伝 Mahāvastu から確認される。[3] ＬＶ 92. 4では，地上に誕生した菩薩が lokottara という形容で呼ばれている。

遊戯する仏陀。本来世間には属しない仏陀。このような仏陀は，大乗において釈尊を本初からの仏とした法華経のそれに近い。小乗では律の因縁譚にすぎなかった仏伝がなぜＬＶでは大乗経典たりえたのか，その答えはこの仏陀観の変容にあると思われる。ＬＶ自身が述べるところによると，この経は先のあら

(1) 遊戯をただ「自由自在な活動」と訳すならば，形而上学的な意味が失われてしまう。この遊戯という言葉は幼童クリシュナの信仰や，ヒンドゥー教の līlā の宇宙観と共通するものがある気がする。

(2) 原形での用例　48.5; 119.7; 124.19; 126.15; 157.7; 183.22; 392.8。

(3) Mahāvastu, I, 168. 8-9 の偈で明確に示されている。また，高原信一「マハーヴスツに表われた仏陀観」印佛研 6-1，および「Mahāvastu にみられる福徳論」福岡大学35周年記念論文集，人文編（1969年）を参照。

ゆる如来によって必ず説かれてきたという（5. 3-17）。ここでＬＶという経典は明らかに釈尊の伝記を意味していないであろう。ここでＬＶはすべての如来に共通な伝記と見なされているからこそ，すべての如来に繰り返し説かれるわけであろう。地上に下生して成道を衆生のために見せる仏の生涯にはすでに固有性はありえず，過去に数限りなく同一に繰り返された。それはすべて法性（dharmatā）に従った行為である。それゆえに，仏陀の成道に至る行為を述べたＬＶという経典は釈尊の伝記であることを越えて，すべての如来に同一な真理になるわけであり，そのためにその経も過去に数かぎりなく同一に繰り返されてきたものとなる。釈尊の個人性というものは永遠の中に消失してしまい，釈尊の伝記は永遠に繰り返されるものとなる。釈尊の伝記であるＬＶがそのまま大乗経典たりえ，仏伝文献であることを越えて，哲学的真理となろうとしているのは，釈尊が，もはや地上に現われた一人物ではなく，真理の体現であると見なされているからである。

降魔も成道もみな戯れであり，この戯れは過去と未来に無限に繰り返される，ＬＶのこのような仏陀観はしかしまだ完全に自覚されてはいない。そこで戯れているのは誰か，永遠の仏と釈尊の関係がまだはっきりしていない点，ＬＶは過渡期にあるといえよう。ＬＶの仏身観はまだ思想的ではなく，その前段階の心情的な段階に属している。

１・２　原形から知り得る宗教的な背景

大衆部と直結する「世間への随順」の語が原形に頻出することは上で述べたが，ＬＶを生み出したサークルの宗教的な背景をその他，原形から知り得るものだけあげてみると，

１．経典の筆写供養は述べられない。塔の供養から経典の筆写に重心が移る現象はＬＶでは見られない。もっともＬＶを生んだ仏陀信仰が経巻崇拝よりも仏塔崇拝と密接な関わりを持ちつづけたことは当然予想されることである。また仏塔崇拝としては，stūpa の語は出てこず，すべて caitya の語が使われていることは注意される。[1]

２．知名の大菩薩・仏は，弥勒のみが出てくる。観音や文殊や阿弥陀は全く述べられない。ＬＶはおそらく釈迦牟尼仏のみを仰ぐグループから生まれ，それらの信仰とは無縁だったらしい。

(1) 原形での用例：caitya 24.9; 65.3; 73.9; 83.16; 97.10; 226.12; 368.18。

3．大乗の「空」の教義は，原形にはまれにしか出てこない[1]。輪廻を重視する本生話から仏陀を仰ぐ者たちにとって「空」の思想は必要なく，興味がなかったのであろう。ＬＶを作った詩人たちは「空」のタームを知ってはいても，それがよもや大乗仏教の中核的思想になろうとは思ってもいなかったに違いない。ＬＶはただ菩薩思想の熱烈さによって大乗を宣言しているのである。

4．「十地」の語は出てこないが，「菩薩地」，「灌頂地」，「不退転地」の語は見え，「一生補処」の語も出てくる[2]。十地思想は仏伝から育ったといわれるが，その萌芽を示すものであろう。

１・３　原形の成立地

私はＬＶ原形の成立地を西北インドと考える。その理由の第一がＬＶの挙げる文字のリストである。その文字のリストは原形にあるもので，64種の文字を列挙するが，その中にはサカ文字，キラータ文字，カーシヤ（カシュガル）文字，チーナ（秦）文字，フーナ文字などの文字の名があり，普曜には大秦（ローマ？），康居の語も見える[3]。これらの国の情報は西北インドにおいて最も関心をもたれ，また集められやすかったはずである。またこの文字のリストの直後に普曜は四十二字門（Arapacana）を出すが，これは中央アジアと関わりが深いアルファベット表である[4]。

理由の第二に言語的特徴が挙げられる。ＬＶや法華経の韻文部分には -aṃ の代わりに -u という語尾が出てくる。これは西北インド方言，特にガンダーラ語の特徴である。この西北インド方言の痕跡は例えば中国地方で伝持された Mahāvastu のテキストには見られないものである。季羨林博士はこの特徴から，ＬＶや法華経はある時期に西北インド方言の影響下にあり，それが次第にサンスクリット化されて，韻文部分にのみこの特徴が残ったと推定した。博士

(1) 原形での用例：śūnya117.1; 375.11; 419.6; śūnyatā-anupalambha392.16; śūnyatatva414.15。それらしい表現は 127.12; 393.3-12; 419.11。付加部分における熱心な空思想の標榜とは対照的に原形部分ではまばらである。

(2) 原形での用例：bodhisattvabhūmi2.9; 64.21; abhiṣekabhūmi36.1; avaivarti=kabūmi35.22; ekajāti-pratibaddha2.5; 50.16。

(3) 山田龍城「梵語佛典の諸文献」p.10に一覧表がある。

(4) Sylvain Lévi; Ysa. *Memorial Sylvain Lévi*,pp.355-363。中村元「東西文化の交流」p.184。

はさらにＬＶや法華経は西北インド方言で書かれる段階の前には東方の古アルダ・マガダ語で書かれていたとして，梵文テキスト中にその方言の痕跡を指摘し，ＬＶや法華経は東方の古アルダ・マガダ語で初め作られ，その後西北インドのガンダーラ地方にもたらされてその方言の影響を受けたという，マガダ→ガンダーラ説を唱えた[1]。博士のマガダ起源説については，F.Edgerton 博士の有力な反論もあり[2]，疑いがもたれるが，西北インド方言の影響についての見解は現在でも大きな反証は見出せない仮説であり，これは西北インド成立説を助けるものである。またＬＶと法華経とは，Edgerton 博士の研究からもわかるように，仏教梵語の中でも特によく似た言語的特徴を示し，成立の背景が類似していたと思われるが，ＬＶよりも研究が進んでいる法華経において現在多くの学者から西北インド成立説が出されていることは，ＬＶの西北インド成立説を補強する１つの根拠となりうるであろう。このほか漢訳の研究を根拠にＬＶの西北インド成立を擁護する意見も出されている。J.Brough 博士はＬＶと異なる普曜のアルファベット表を検討したが，その原語はガンダーラ語で書かれてあったと推定した[3]。普曜は原本よりあまり隔たっていないはずであり，それがすでにガンダーラ語であったとすると，原本は西北インドで成立した可能性が高くなる。だが博士の推定も決定的とは言い難く，普曜経がガンダーラ語であったことを決定するには全体にわたる音写語などの検討が必要であろう。ともあれ，以上の説をふりかえる時，ＬＶが作られた土地として西北インドが有力な候補地であると考えられる。

(1) ＬＶ中のガンダーラ語の痕跡については，季羨林「印度古代語言論集」pp.205-207 を，またＬＶ中のアルダ・マガダ語の痕跡については，同書 pp.274-276 を参照。季博士のこれらの論文や H.Lüders 博士の論に基づき，岩本裕博士は岩波文庫「法華経」上巻の解題で，法華経ネパール本の西北インド成立説と原本の東インド成立説を論じておられる。

(2) F.Edgerton 博士による，季博士のマガダ語痕跡説への批判は BHSG.1.24-29 に詳しくなされている。また季博士の西北インド方言影響説への批判は同書 1.97 にあるが，これは西北インド方言の痕跡が途中から入ったものだとする見方を批判しているのであって，西北インド成立説を逆に助けるものであると私は思う。また H.Bechert 博士の批判もあるが，これについては季博士自身の反論がある（「民族文化宮図書館所蔵梵文《妙法蓮華経》写本」序 pp.10-16 ）。

(3) J.Brough; The Arapacana syllabary in the old Lalita-vistara , BSOAS 40, Part 1, p.94. Brough 博士はガンダーラ語と判断する一方，しかしガンダーラ語はテキストの最初期の姿の言語ではなかったろうとの補足も付け足されている。

中に478ａ8～15の三十二相を記述した断片がある。これはＬＶの一部である可能性がある。高原信一氏の研究によると、この三十二相はＬＶに系統が最も近い。[1] 従って，ＬＶの原本を利用した箇所は十八変品にあたる部分だけではないかもしれない。

以上の根拠により，太子瑞応の普曜十八変品にあたる部分は，支謙の当時すでに中国に伝わっていたＬＶの原本から取られたとみなすべきであるが，このことによりＬＶの梵本が初めて中国にもたらされた年代が，竺法護の普曜の翻訳（西暦308年）よりも60年から80年さらに遡ることになるわけである。この事実は先に述べたＬＶの第１訳の翻訳年代と合致する。太子瑞応があるいはこの第１訳の訳文を利用した可能性を考えてもおかしくない。（歴代三宝紀は「古録」，つまり出三蔵記集の「旧録」を根拠として，この第１訳は竺法護の訳と「小異」であったとする。）ＬＶの梵本がすでに西暦220～250年に中国にもたらされ，さらにこの段階でその梵本には巻八にあたる大きな付加部分が付いていたことを考えると，巻一～巻七の原形部分の成立年代はさらに半世紀は遡ると思われる。このことから，成立は西暦200年を切って，多分それより数十年早いと推測される。[2]

１・５　作　　者

ＬＶの原形を作った人たちは学者というよりも詩人であったろう。また出家者ではなく在家者であったろう。ＬＶは「きかせどころ」にさしかかると必ず散文から韻文に変わる。これは「語りもの」として初めに作られた事情を物語るものである。しかも語られる仏伝は阿含中の記述には基づかず，民間伝承に基づいて勝手に創作している印象を受ける。[3] 彼らはいわゆる「ダルマ・バーナカ（法師）」と呼ばれた人たちであったろうと思われる。ただしこのダルマ・バーナカという言葉は，ＬＶ自身の中で理想の姿として付加部分に出てくる。[4] このことは原形を作った人物が市井のダルマ・バーナカであったのに対し，付

(1)　高原信一「Mahāvastu 所伝「仏の三十二相」について」佛教研究第２号 pp.99-90。

(2)　ＬＶの原形は，静谷正雄博士が『初期大乗仏教の成立過程』で指摘された，小品般若以後の大乗的キー・ワードをほとんど備えている。従って，ＬＶ原形の成立は西紀150年以前にあまり遡ることはできないであろう。

(3)　第３段階の付加で説明する。

(4)　dharma-bhānaka 179.10，432.11。

１・４　原形の成立年代

次に原形の成立年代を検討する。普曜は永嘉２年（西暦308年）５月に訳されている。だがこの訳よりさらに古いＬＶの訳出が，「出三蔵記集」の巻四「新集続撰失訳雑経録」中の，「蜀普耀経八巻　旧録所載似蜀土所出」との記述から知られる。これは「道安録」ではなく別の資料「旧録」に依って僧祐が記録したものである。この「旧録」の記載によれば蜀（西暦221～263年）にＬＶの第１訳があったことになる。この時期にＬＶの梵本が中国に存在したことは実は別の証拠より確かめられる。黄武元年（西暦222年）から建興年中（西暦252-3年）に至る間に支謙に訳された太子瑞応本起経は，松田祐子氏の昨年の発見によって，普曜の一部を含む様々な経のパッチワークであることがわかった。[1] つまりこの経は異出菩薩本起経の梵本と修行本起経の漢訳ならびに多少の未知の資料のパッチワークによって出来ており，末尾は普曜の十八変品そのものから出来ている。これより普曜の十八変品の部分は太子瑞応が翻訳された時（西暦222～253）にすでに存在していたことが明らかになる。問題は当時中国に存在していた普曜の十八変品の部分は本当に普曜の一部だったのか，ということである。松田氏は実際にこの部分を別の仏伝（Ｙ）の一部であり，後に普曜の漢訳の際に中国で付加されたものと断定してしまっているが，理由は示されていない。確かに十八変品を含む普曜の巻八の部分は原形と比しては付加部分であるものの，中国でなされた付加ではないことは，次の根拠がある：

1．ＬＶの異本である方広にもこの十八変品を含む付加部分が全く同じ内容で付いている。方広の該当部分は原本に基づくもので，中国で付加されたとは考えられない。

2．普曜と太子瑞応の一致部分は普曜の借用とみなされるが，この十八変品の部分は単なる訳文の借用ではなく，こまかに訂正を行いながらの借用がなされている。このことは普曜の原文梵文に対応部分が存在していた証拠である。

3．太子瑞応の普曜十八変品と一致する部分より前の部分は，修行本起経の漢訳と異出菩薩の梵本との２つのソースによってほとんど出来ているが，全部がそれによって出来ているのではない。どちらのソースにも属しない空白部分が少し出来，その空白部分は別の資料を用いたと思われる。その

(1)　Yūko Matsuda; Chinese Versions of the Buddha's Biography.　印佛研 37-1 pp.489-480。

加を行った人物にはすでにダルマ・バーナカは理想像となっていたことを示している。また原形を作った人物があくまで詩人として作品を作ったのに対し，対照的な態度を示すのがこのＬＶの付加を大規模に行った人物で，彼は出家の学者らしく，よく阿含に精通しており，厳密な態度で阿含中の仏伝資料をＬＶの該当場所に挿入し，阿含の伝承とＬＶの仏伝とが矛盾している箇所は阿含に従って訂正するという作業を注意深く行っている。しかし彼は同時に大乗徒であったらしく，大乗的な教説を衒学的に述べる断片の付加も行っている。大乗徒でありながら小乗の部派における出家者であることは，時代が下がるにつれて珍しいことではなくなったが，しかし彼が所属した部派は特に大衆部ではなかったかと推定される。その根拠は，(1)この人物が付加に際して借用した阿含資料は，大衆部説出世部の Mahāvastu に用いられた阿含と近いものであり，大衆部系統のものではないかと考えられる。[1] (2)彼は部派に所属していたと思われるのに，彼が付加した部分にも「随順世間」の語が出て来ており，[2] この語は仏を出世間（lokottara）とする大衆部の考えと密接に結びついている。さらに彼の付加した部分では仏陀が実際に lokottara と呼ばれ，あるいは lokottaradharmadeśika と呼ばれている。[3] (3)また「入胎の清浄さ」を強調するために，大規模な付加を行っていることも，彼の立場を明らかにする。以上の文献的根拠をみても，また状況的に考えてみても，原形ＬＶの共鳴者である彼の所属は大衆部系が最も適している。出家者たる彼の，阿含と大乗経典をそのまま一致させ結合しようとした，学者としての活動は，大衆部系で最も周囲の理解が得られ，阿含の借用も許可されたはずであるからである。

１・６　原形の品の構成

ＬＶと方広の品名は全く一致しているが，普曜とＬＶは品名が違い，品分けも異なっている。普曜の品名および品分けは不自然である。ＬＶの方が本来的である。そう思う理由は多い：(1)誕生品とせずに欲生時三十二瑞品とする品名の奇異さ。(2)入天祠品が Ābharana 品を含んでしまっている不自然さ。(3)王為太子求妃品と試芸品とが分かれてしまっている不自然さ。(4)出家品と告車匿被馬品とが分かれてしまっている不自然さ。出家品が出家まで至らないで終わ

(1) 「ラリタヴィスタラの部派」宗教研究279号 pp.181-182。
(2) 用例: 136.7; 179.18; 238.3; 267.4。
(3) lokottara 425.4; lokottaradharmadeśika 424.21。

ってしまう。(5)迦林龍品という品名の不適切さ。カーリカ龍王の役割は重要ではない。(6) Māradharṣaṇa を召魔品と降魔品に分けることの不自然さ。(7)観樹品という品名の奇異さ。(8)転法輪品とせずに拘隣等品とする品名の奇妙さ。——以上のような，普曜の品名ならびに品分けのおかしさ・不自然さが，ＬＶと普曜の品名を比較してゆくと感じられる。

ＬＶの品名の方が明らかに本来的で古いと思われることはＬＶ中の文からも証される。ＬＶは，仏伝の主題として，次の項目を列挙する。（２箇所あるので，ＡとＢとする。）

Ａ：(1)avakramaṇa, (2)janma, (3)abhiniṣkramaṇa, (4)duṣkaracaryā, (5)bodhimaṇḍopasaṃkramaṇa, (6)māra-dhvaṃsana, (7)bodhi-vibodh=ana, (8)dharmacakra-pravartana, (9)mahāparinirvāṇa　（ＬＶ36. 2-3）

Ｂ：(1)avakramaṇa, (2)garbhasthāna, (3)janma, (4)yauvana-bhūmi, (5)dāraka-krīḍā, (6)antaḥpura-nāṭaka-saṃdarśana, (7)abhiniṣkramaṇa, (8)duṣkaracaryā, (9)bodhimaṇḍopasaṃkramaṇa, (10)māra-dharṣaṇa, (11)bodhy-abhisaṃbodhana, (12)dharmacakra-pravartana, (13)mahā=parinirvāṇa　（ＬＶ44. 16-19）

ＡＢ両方の仏伝の項目の名をＬＶの品名と並べてみるとき，両者がよく類似していることに気づく。

ＡＢ　avakramaṇa → 品名 Garbhāvakrānti-parivarta;
ＡＢ　janma → 品名 Janma-p. ;
ＡＢ　abhiniṣkramaṇa → 品名 Abhiniṣkramaṇa-p.
ＡＢ　duṣkaracaryā → 品名 Duṣkaracaryā-p.
ＡＢ　bodhimaṇḍopasaṃkramaṇa → 品名 Bodhimaṇḍagamana-p. ;
Ａ māra-dhvaṃsana, Ｂ māra-dharṣaṇa → 品名 Māradharṣaṇa-p. ;
Ａ bodhi-vibodhana, Ｂ bodhy-abhisaṃbodhana → 品名 Abhisaṃbodhana-p. ;
ＡＢ　dharmacakra-pravartana → 品名 Dharmacakrapravartana-p.

ＬＶの品名の命名が，仏伝の項目としてあげられたＡ・Ｂの記述と直接結び付いていることがよくわかる。

仏伝の項目Ａ・Ｂを述べた箇所はＬＶの原形に属し，普曜にも存在する。しかし普曜の品名はＡ・Ｂの項目とかなり違っている。このことがＬＶの品名が古い，恐らく正しいもので，普曜の方がおかしいことを証明していると思われる。

またＬＶの品分けを普曜のそれより古いと判断する別の根拠もある。

1．方広は，普曜の十八変品から優陀耶品の４品にあたる付加の部分を転法輪品にしまいこんでしまっているが，そのＬＶにない大きな付加のため異常に脹らんだ転法輪品となってしまっている。方広は古いＬＶの品分けを保っているため窮屈な形となり，普曜ではその不自然さを解消するため新しい品分けを導入したと解釈されよう。

2．普曜はＬＶの Nidāna 品から Kulapariśuddhi 品までをつなげて，１つの品にしてしまっているが，これはおかしい。K. 品の末尾には重頌があるが，これは K. 品の内容を重ねてのべたものである。つまり，この重頌が付けられたときにはすでに K. 品は独立していなくてはならない。K. 品の前には勧発の偈があるが重頌はない。もしそこに品分けがなければ，なぜ後ろの部分の内容のみが重頌で繰り返されるのかわからないことになろう。この重頌は原形たる普曜にもあることから，普曜の段階ですでに K. 品は独立していたとみなすべきである。このこともＬＶの品分けの方が普曜より古い証拠となろう。

１・７　原形の中の韻文と散文

ＬＶの原形では長行重頌の形式は現在の梵本に見られるほど多くはなかった。第３段階の付加において故意に長行重頌の形式にされたのであり，それ以前は韻文での語りを中心として，それに散文のつなぎの語りを配置する在り方が古い形式のなごりとして残っていた。ＬＶに付加を行った編者は，原形で韻文のみで語られて散文では語られていなかった場所を，散文だけ読んでも意味が通るように，長行を韻文の前に付けた。あるいはまた品末に重頌が無い品には，その後に重頌を付けるということを行った。こうして編者はできるだけ長行重頌の形式にしようとしたのである。このようにＬＶの付加において故意に長行重頌の形式に変えられた箇所は多い：(1)Nidāna 品は全体が散文であるが，その品末に重頌を付け加えられて長行重頌の形式にされた。(2) 58.1-2 の韻文には，58.3-11 の同じ内容の散文が加えられた。(3)誕生の場面は原形では韻文でのみ語られていたが，その前の位置に散文 83.8-87.2 を付加して長行とし，従来あった韻文 92.1-93.5 を重頌にしてしまった。(4) 95.7-96.2 の散文は，原形の韻文 94.3-95.6 で語られた内容を，もう一度繰り返すために付加された。ただしこの場合，散文が後ろになってしまっている。(5)アシタ仙の

場面は原形では韻文でのみ語られていたが，その前の位置に散文 101.9-108.8 を付加して長行とし，従来あった韻文 108.10-110.14 を重頌にしてしまった。(6)Kṛsigrāma 品の終わりに，品の内容を繰り返す重頌 133.2-136.8 が加えられた。(7)211.10-213.3 の散文には 213.9-214.13 の重頌が加えられた。(8)チャンダカとの別れと王宮の悲嘆の場面は原形では韻文でのみ語られていたが，その前の位置に散文 225.5-229.19 を付加して長行とし，従来あった韻文 229.21-237.16 を重頌にしてしまった。加えられた長行は，重頌とよく合わない。(9)Trapuṣabhallika 品の末尾近くに品の内容を繰り返す重頌 385.9-386.2 が付加された。(10)初転法輪の説法は原形では韻文でのみ語られていたが，その前の位置に散文 416.13-418.21 を付加して長行とし，従来あった韻文 419.1-422.6 を重頌にしてしまった。

付加の編者が長行重頌の形式を大切にしていることは，(1)付加 248.13-250.5 における重頌 258.3-16 の同時の付加，(2)付加 305.4-307.16 における重頌 307.18-308.14 の同時の付加，(3)改変 321.17-325.21 における重頌 326.2-330.4 の同時の付加，(4)付加 422.7-436.7 における重頌 436.9-438.12 の同時の付加，(5)付加 439.7-443.10 における重頌 443.13-444.10 の同時の付加，からも確認される。

原形では韻文が好まれた。大事な場面になると韻文に切り換えられた。このことは処胎品や誕生品や出家品などの重要な品ほどすぐわかることである。外薗幸一氏は散文の方が古く，韻文の方が成立が新しいといっておられるが，[(1)] これは間違いである。外薗氏はＬＶと方広だけを比較し，普曜を加えた比較をされなかった。もし普曜を比較に加えていたなら，ＬＶに韻文が多く方広に少ない理由は，方広が削ってしまったためであるということがわかったはずである。また普曜には韻文は散文に誤って訳されてしまっていることが多く，見かけ以上に普曜には韻文が多く含まれていることがわかったはずである。方広がいかに原形にあった（普曜にあった）韻文を，改竄において削り落としてしまったか，次にあげてみると：(1)誕生品において原形 108.10-110.4，112.3-117.14 が削られている。(2)観農務品において原形 132.15-22 が削られている。(3)音楽発悟品において原形 183.16-185.16 が削られている。(4)感夢品において原形 187.7-193.2，196.11-20 が改変のため削られている。(5)出家品において原形 202.17-203.7，205.21-208.12，209.15-213.6，214.14-216.12，218.19-225.4，

(1) 外薗幸一「Lalitavistara と方広大荘厳経」日本佛教学会年報43号 p.31

229.21-237.16 が改変のため削られている。(6)降魔品において原形 303.19-305.3, 330.9-336.15, 337.7-338.19 が削られている。(7)成正覚品において原形 355.15-356.12 が削られている。

またいかに普曜において韻文が誤って散文として訳されてしまったかは，（上）と（中）の論文の註に記された箇所の多さを見るだけで十分わかる。その甚だしい例が普曜の507aから509bにかけての箇所で，連続する偈が漢訳では全部散文に訳されていて，その範囲は大正蔵の２ページ以上に及ぶ。この部分はまた漢訳の原文が韻文であったことを証明する絶好の場所となろう。

現在の梵本において韻文の占める割合は全体の45％であるが，原形において韻文の占める割合は全体の52％であった。古い形のほうが韻文の占める割合が大きかったことがわかる。とくに原形で韻文で歌われる部分は物語の中核であることが多い。それらは韻文が先行し，散文は後からつなぎとして付けられている。このことは入胎・誕生・出家・降魔・成道などの重要な品ほどあてはまる。周辺的で重要でない品は散文で語られ，さっさとすまされてしまっている。皆が興味がある場所は韻文を交えてゆっくり語り，あまり重要でない場所は散文で素通りしてしまう作り方になっているわけである。恐らく，原形の形成の始めにはまだ長行重頌の形式は意識されないでいたに違いない。しかし原形の中にもすでに長行重頌の形式が出てきているから，形成の途中からその形式が入りこんだものと思われる。このことから，私はＬＶの原形の形成には２つの段階があると思う。長行重頌の形式が意識されていない段階と，その形式が意識されるようになる段階である。付加部分の時代に入るとますます長行重頌の形式は意識されるようになる。

2　付加部分の成立

以上で原形部分の考察がほぼすんだので，付加部分の考察に移ることにしたい。

2・1　付加による系統の発生

付加の在り方が，原形からＬＶ・方広・普曜の異なる３つの系統を生み出した。普曜とＬＶの相違は次のようにまとめられよう。

1．普曜が最も原形に近いが，普曜の品の分けかた，および品名は本来のものを伝えていない可能性が強い。

2．普曜の巻一～巻七の部分は対応部分がそっくりＬＶの内側に見出されるが，それらの共通部分は原形にあたると考えてよい。巻七までが原形であったことはその終わりで経の名前が知らされ嘱累の言葉が述べられていることからも確認される。

3．この原形に４割ほどの付加を加えたものが現在のＬＶである。付加は単に原形に継ぎ足しただけの単純なものが多いが，原形への改変もかなりある。

4．普曜の巻八の部分の十八変品から優陀耶品までは方広にあるがＬＶにないため，この部分は方広と普曜が共有する後代の追加部分であると思われる。また同じ巻八の歎佛品と嘱累品はＬＶにも存在している。このことはＬＶの分岐が，普曜巻八の歎佛品と嘱累品の部分が付加された後で，十八変品から優陀耶品までの部分が付加される前にあったことを示している。後者の部分は前者の部分が原形に付加された後，途中に割り込むかたちで付加されたのであろう。

5．普曜の巻七までの部分でも，方広・ＬＶにはなく普曜だけにある，普曜の独自な部分がわずかであるが存在する。すなわち普曜はＬＶや方広の原形としての位置から，多少の独自の発展を持ったと思われる。

次に，方広の二者との違いは次のようにまとめられよう。

1．方広は普曜が持たず，ＬＶと共通する大きな付加部分を持っている。ＬＶとの相違は出家品と降魔品を除けばごく小さい。方広とＬＶは本来同一の系統であったとみなしうる。原形に大規模な付加を行ってその系統が成立した後，ＬＶと方広が分岐したと思われる。

2．ＬＶとの分岐点で，方広はＬＶにない改竄を加えられている。この改竄の結果，ＬＶが普曜の原形部分を残している箇所でも，方広はそれを失ってしまっていることがある。この改竄は方広の感夢品・出家品・降魔品に集中的になされている。

以上のような普曜・ＬＶ・方広三者の関係から，次のように大きく４つの成立段階が考えられよう：

第１段階　原形部分の成立……これはほぼ普曜の巻一～巻七にあたる。

第２段階　普曜経巻八の付加……これは２つの段階に分けられる：（Ａ）普曜巻八の歎佛品・嘱累品の部分の成立。（Ｂ）普曜巻八の十八変品から優陀耶品までの４品の付加（ＬＶはこの前に分岐）。

第３段階　ＬＶの成立……ＬＶと方広の系統が，大規模な付加増広がなされて出来た。

第４段階　方広の成立……大規模な改竄がＬＶから方広を分岐させた。

これらの各段階を，順次考察する。(1)

２・２　第１段階の成立

原形の形成の内側にも恐らく成立の段階があったろうことは１・７で述べた。

原形が唯一のオリジナルという形で存在したか疑われるが，いちおう普曜の巻一～巻七までの部分をＬＶや方広が分岐する前の統一的なかたちとして，原形と名付けることができよう。ただ普曜独自の付加と思われる部分が巻七までの部分にも若干存在している：(1)488b20-26 三獣渡河の譬えの部分。(2)499a27-b6 農民が苦しみ，鳥が虫を啄ばむのを見て菩薩が従者に問う部分。(3)508c23-509a4 王がゴーパー妃を慰め，太子の誕生時を回想する部分。――これらの付加は恐らくＬＶよりも後のものである。つまり普曜の巻七までの部分は，実はＬＶの原形としての位置から多少ずれた処にある。しかしそのずれはそれほど大きくない。数パーセントほど伝承の過程で加わった部分であり，あまり意図的な付加とはいえないであろう。

２・３　第２段階の付加

第２段階の，普曜の巻八の部分の付加は（Ａ）歎佛品と嘱累品の付加と，（Ｂ）十八変品から優陀耶品までの４品の付加に分けられることは先で説明した。

第２段階のＡの付加

普曜の歎佛品・嘱累品はＬＶと方広の Nigama 品にあたる。この部分は幾つかの独立した部分に分離できる。これは本来別個のものを合わせたと思われる。異なる「付嘱」の型を組合せて，重層的にこの部分は形成されたらしいことが推測される。(2)

第２段階のＢの付加

普曜の十八変品から優陀耶品までの４品は方広の転法輪品の後半にあたる。

(1)　成立系統図は英文レジュメの中にあげておいた。

(2)　外薗幸一「Lalitavistara 嘱累品の研究(2)」印佛研 32-1，pp.477-474。

この部分の研究は要旨を発表したが，ここでそれを補っておきたい。(1) 普曜と方広のこの部分はよく一致するが，普曜は方広にはない幾つかの段落をもつ。それは(1) 531b19-c5 (2) 532b24-c2 の部分である。普曜は方広を包摂してしまっており，方広にないものは普曜にあっても普曜にないものは方広にほとんど存在しないといってよい。このため，方広の原本にはこの普曜の十八変品から優陀耶品までにあたる部分は存在せず，普曜を模倣して中国で作られたのではないかという疑いが出てくる。しかも方広が普曜を参照していることは偈の訳文の類似からわかる。だが方広が梵文の原本に基づいている決定的な根拠をあげることができる。方広の 613b16-19 にはビンビサーラ王の誓願が出てくるが，これは普曜ではなかった，あるいは訳されなかった文である。この誓願は五分律や根本有部律や中本起経にはないが，パーリ大品や四分律では同じコンテキストで出てくる。これはインドの原文に基づかなければわからないことである。方広が原本に基づいているならば，普曜の十八変品から優陀耶品までの４品もやはりインドにおいて付加がなされ，中国で普曜に付加がなされたのではないことの証拠にもなろう。

さて，第２段階のＢの付加はＬＶにはない。その付加がなされる前にＬＶは分岐して，第３段階の付加を受けたものと思われる。全体を大幅に増加させた第３段階の付加を受けているという点で，ＬＶと方広は一致している。つまりＬＶと方広の分岐はこの大規模な付加がなされた後でなくてはならない。それなのにどうして，方広には第２段階のＢの付加がなされており，ＬＶにはなされていないのか。ＬＶにもかつて第２段階のＢの付加がなされていて，それが後から除かれたということは考えられない。上で述べたように，方広の第２段階のＢの部分は普曜のものとほとんど変わらない。もし第２段階のＢの付加を付けたままで，第３段階の付加を受けたとしたら，第３段階の付加は全体にわたるものであるから，必ず第２段階のＢの部分にもさらに手が加えられたに違いない。(2) ところが，方広の第２段階のＢの部分は全く無傷のままであることは，普曜との比較からわかる。このことは，方広の第２段階のＢの付加は第３段階の付加を受けた後でなされたことを示している。恐らくインドでは，普曜のように第２段階のＢの付加がなされた系統と，ＬＶのように第３段階の付加がな

(1)　宗教研究第63巻第４輯283号（1990年３月）pp.139-141。

(2)　第３段階を通過していたなら，第２段階のＢの部分は長行重頌の形式に必ず直されていたであろう。（１・７参照）

された系統とが，長い間並行して存在していたであろう。そして方広はＬＶと同じ系統であったが，ある時期に写経生が両ヴァージョンを比較して，古いヴァージョンのもつ第２段階のＢの付加部分を，新しいヴァージョンに追加し，完備したものにしようとして，できたのではないかと思われる。

２・４　第３段階の付加と改変

第３段階を成立せしめた付加は原形の全体にわたるものである。どのような意図をもってこのような大規模な付加がなされたのであろうか。先行する論文に記された付加部分をその目的に着目して分類してみると次のようなタイプに分けられる。

１．長行重頌の形式に整えるための付加。

本来 Campū に似た原形の姿を，法華経の如き長行重頌の形式に一貫して直そうとしたため，どれほど多くの付加がなされたかは，１・７で先に述べた。

２．入胎の清浄さを強調するための付加。

入胎の清浄さの主張が，Garbhāvakrānti 品及び Janma 品において大きな付加の原因となっている。G. 品では，60.6–63.18 と 65.7–67.8 と 73.1–10 の３箇所において，宝荘厳殿 Ratnavyūha という菩薩の胎中の住まいについての付加が行われている。この付加の意図は，付加部分自身が冒頭で語っている通りである。一部の天子たちが，不浄なる人間の胎内になぜ菩薩が住しえたかという点で，疑いをもっている。そのために説法を中断して世尊により菩薩の胎中の住まい・宝荘厳殿が聴衆に示され，その不思議な性質が説かれるのである。次に Janma 品では，87.3–91.10 の付加において，やはり同じように説法が突然中止され，未来世には入胎の清浄さ（garbhāvakrānti-pariśuddhi ）を信じない比丘たちが出るであろうと世尊の予言が語られる。悪比丘たちはこの経典を誹謗し，この経を信ずる者は迫害される。敵を予想した上での入胎の清浄さの主張である。論敵があり，しかも仏陀観の核心をめぐる問題であるからこそ，G. 品とJ. 品に付加を行った編者は経証とするために世尊の言葉としてこのことを経に加えざるを得なかったのであろう。入胎の清浄さとは仏は世間に汚されることがないという「出世間」の仏身観を主張するものである。

３．仏を讃嘆するための付加。

讃仏部分を増す目的で付加がなされた。(1)菩薩の形容 10.2–18　(2)菩薩の偉大な性質 274.18–275.16　(3)諸天の仏の讃嘆 357.18–360.9; 361.13–368.2。

４．話のスケールを拡大するための付加。

(1)王家の列挙の拡大 21.21–22.20　(2)禅定の達成度を上げる 129.3–11　(3)あらゆる数の単位 146.21–150.18　(4)あらゆる技芸の種類 156.9–157.2　(5)外道のあらゆる苦行の種類 248.13–250.2　(6)神々しい出来事を付加 273.9–15　(7)魔物のあらゆる奇怪な姿 305.4–307.16　(8)千の宝座 410.1–10　(9)道場の変成と数億の集会 413.1–18。

５．思想的な充実を目的とした付加。

大きなものは２つある。(1)Sañcodanā 品の偈頌の付加。(2)Dharmaca＝krapravartana 品の法輪の性についての説法の付加。

６．欠けている発達仏伝挿話を補うための付加。

仏伝は成長してゆくものであるから，ＬＶが付加された時代には，すでに多くの原形にはない仏伝の挿話が出来ていて，付加の編者は付加に際して，その重要ないくつかを補う必要を感じたものと思われる。付加において加えられた独立した挿話は次の通り。(1)兜率天からの四種観察 19.6–20.9　(2)菩薩の母の三十二種の性質 25.5–18　(3)嫁いだゴーパーと家人とのいさかい 157.10–159.17　(4)三時殿の警護 186.9–20　(5)ゴーパーの前兆夢 194.7–196.10　(6)３つのチャイトヤと１つの池の因縁 225.5–229.19　(7)マーヤーの訪問 252.8–253.22　(8)女神スターヴァラーの大地からの出現 318.1–319.16。また（他の伝承に基づいて）差し替えられた挿話は次の通り。(1)スジャーターの供養 265:1–270.14　(2)二商人の供養 381.3–383.22。

７．仏伝を阿含中の仏伝の記述と一致させるための付加。

阿含資料の逐字的な借用箇所は先に論文（中）の「ノート」で14箇所指摘した。[1] それらの用いられた部分を見ると，ＬＶの付加の編者は仏伝となりうる阿含資料のほとんどをＬＶの中に編入したといってよい。また付加の編者の強い阿含志向は，阿含の逐字的な借用の外に，阿含に基づく伝承によるＬＶの改変にもなって現われており，阿含の仏伝の伝承が，ＬＶ原形の仏伝の伝承と食い違っている場合，ＬＶを阿含と一致させるため伝承の転換が行われた例を，先行する論文の註で４例指摘した。[2] このような阿含尊重の傾向は，第３段階の付

(1)　さらにもう１箇所，14.7–18.5 の転輪聖王の記述も，恐らく阿含の借用ではないかと疑われる。しかしこの部分は方広にないことから，第３段階の付加よりも後の付加である可能性がある。

(2)　［第１例］（中）p.93 註 a，［第２例］（上）p.94 註 a，［第３例］（中）p.99 註 a，［第４例］（中）p.92 註 i。

加部分に一貫して見られることから，それらの大規模な付加は，一時期に，一人の個人によって意図的になされたと考えるのが自然であろう。阿含を積極的に肯定していることから，大乗を信奉しつつ小乗の部派にも所属している学僧であったろう。用いられた阿含資料はすべてその学僧の所属する部派のものであったと考えられるが，私は以前その部派について大衆部の一系統のものではないかと推測した。(1)

一方原形では阿含の借用は見出されるだろうか。原形に見られる阿含の影響は不明瞭な，漠としたものである。阿含中の仏伝の断片的記述は発達仏伝を生んだ種子であるから，原形の作者の知る仏伝も間接的には阿含に根差しているわけである。しかし付加部分に見られるような阿含の直接の借用は見られない。阿含は原形の仏伝のベースの形成に伝承として作用したが，源泉として直接汲まれたわけではなかった。原形の作者の用いた資料で阿含とつながりそうなものは 243.15-245.15 のルドラカ・ラーマプトラの段と，240.9-243.12 のビンビサーラとの会見を述べた韻文であるが，前者は阿含ではルドラカの段と対になって繰り返されるはずのアーラーダの段を欠き，後者はスッタニパータと比較してみても元の形を認め得ないほど改変された姿であることから，両者とも阿含を直接利用したものではないであろう。

2・5　第4段階の付加と改変

第4段階ではＬＶから方広の系統が分岐した。ＬＶが忠実に残している原形部分が，方広では無残に削除されてしまっていることは先に（1・7）述べたが，削除よりも大規模な改変が方広を最も特徴づけている。それらの大きな改変は感夢品・出家品・降魔品の3つの品で行われているが，特に甚だしい出家品と降魔品の改変においては，ブッダチャリタを模倣した仏伝からの借用部分が大きな役割を果たしたと思われる。ブッダチャリタを散文化したその仏伝は，仏本行集経の編纂に梵本資料として用いられたため，断片的に仏本行集経の中に広い範囲にわたって翻訳されている。その同じ仏伝がインドにおける方広の改変に際して借用されている。この私の推定は別の論文に書いたが，(2) 簡単にそ

(1)　「ラリタヴィスタラの部派」宗教研究第62巻第4輯 pp.181-182。

(2)　「ブッダチャリタの改作仏伝について――仏本行集経と方広大荘厳経に用いられた未知の仏伝――」東北大学印度学講座創設六十五周年記念論文集『インド思想における人間観』所収。

の所論を述べると，

1．方広の出家品では 576a21-b2，b28—c14，c19-577a17，a29-b7，b18-c27，578a13-22 の部分が，また降魔品では 594b6-12，b20-c8 の部分が，ブッダチャリタと対応している文である。

2．仏本行で方広の出家品にあたるのは剃髪染衣品と車匿等還品であるが，剃髪染衣品の 733c13-26，734a17-18，735a11-736b4，b29-c22，737c3-738b23，車匿等還品の 738b25-739b10，740a4-17，b14-741a22，b11-742a1，742a17-23，743b10-23，b29-c5，744b9-c12 の部分が，ブッダチャリタと対応した文である。一方，方広の降魔品にあたるのは魔怖菩薩品であるが，魔怖菩薩品の 779b9-14，785a20-23，787b21-788a28，b28-c22 が，ブッダチャリタと対応している。

3．方広と仏本行がそれぞれ別々にブッダチャリタを散文に変えて，利用したのではない。そのことは，方広と仏本行の借用部分が重なる箇所を比較するとわかる。両者を比べると，ブッダチャリタと対応しない中間の散文部分も共通しており，ある未知の，ブッダチャリタを散文にした仏伝の存在を推定せざるを得ない。

4．ブッダチャリタとの対応箇所の範囲は，方広より仏本行のほうがはるかに大きいが，このことは仏本行が方広を借用したはずがないことを示している。

5．方広が仏本行を借用したはずもない。仏本行は中国で編纂された経典であると思われるのに，方広の改変はインドで行われている。このことから，仏本行が基づいた経典を借用して，インドにおいて方広の改変が行われたと見るべきである。

6．その経典は，ブッダチャリタを忠実に散文に変えた文を中心に，かなりの増広を加えて出来ている。その経の名は「大荘厳」ではないかと推定される。

以上が方広の改変とそこに使われた未知の仏伝についての私の考えであるが，ＬＶの系統の傍流たる方広という新しいリセンションが生じたのは，この仏伝を用いて改変がなされたということが大きな契機となっていると思われる。

3 結　語

以上，私は原形と付加部分について，文面から読み取り得ただけの歴史的・成立史的事実をあげてみた。H. オルデンベルクの研究以来，ＬＶは小乗の仏伝を核として，それに大乗的な色彩を加えたものだという誤解がなされてきた。(1) この誤解はパーリの阿含にあたる非常に古い資料がＬＶの中にあるために生じたものである。しかし，上で論じたように，それらの阿含資料は付加の段階で付け加えられたものである。ＬＶの原初の姿は大乗の詩人たち（ダルマバーナカ）が，出家教団から離れたところで，高らかに仏陀の理想を歌った，純一な宗教作品であったということができよう。

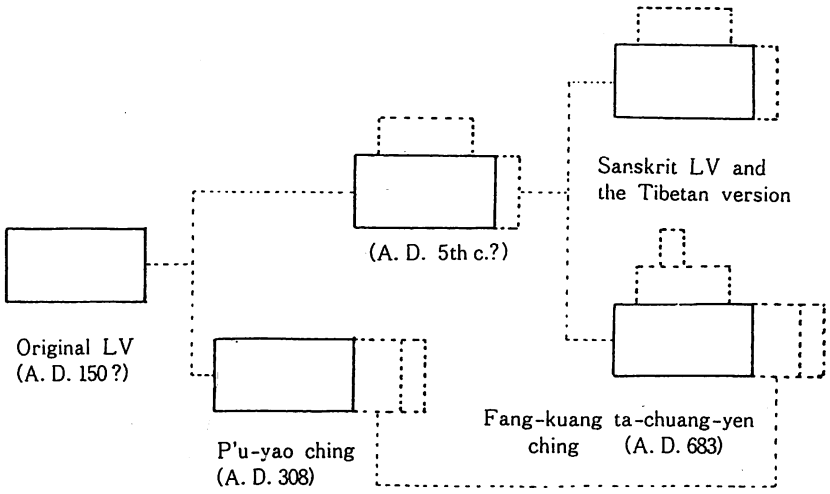
彼ら原形の作者たちはおそらく韻文の朗唱者であり，韻文を中核として仏陀の生涯を物語った。そしてつなぎとしての散文部分も定まって，作品の姿が半ば出来てきた頃，散文の後ろにその内容を韻文で繰り返す重頌の形式が導入され，かくして韻文→散文→韻文という漠然としたプロセスを経て，作品の初めの形が出来た。その後作品は付加と改変を受け，より重頌の形式に整えられ，阿含の仏伝の伝承と接続されることになった。最後の段階ではブッダチャリタ化された。

(1) H. Oldenberg; Über den Lalita Vistara. *Kleine Schriften*, S. 873–888. オルデンベルクはLVを新層と古層とに分け，古層がパーリの聖典と共通している素材から成っている部分，新層が仏教梵語で書かれた部分であるとした。しかしこれは逆であり，時代の新しい仏教梵語で書かれた部分は原形で，オルデンベルクが古層と判断した部分は実はすべて付加部分であることが普曜との比較の結果判明した。

A Reconstruction of the Old Form of the Lalitavistara (Ⅲ)

Kiyoshi OKANO

The Lalitavistara, a Sanskrit biography of Buddha, has two old Chinese translations. The Chinese versions are partly different from the Sanskrit version, and those differences reflect stages of developpement of the work. Comparison between those differences of the versions make clear the stata of the formation of the texts, for the correspondences of the versions show the old strata and differences of them show the new strata. This paper concluding my study of the Lalitavistara, discribes an whole view of formations of the texts. The developpement of the Lalitavistara has four stages. The following figure demonstrates the formations of the versions and its constituent parts.



the constituent parts:

the original form of the lst stage, the assumed Ur-LV

the A added part of the 2nd stage: the last 2 parivartas of the P'u-yao ching (= the Nigama parivarta of the present LV)

the B added part of the 2nd stage: the 25th~28th parivartas of the P'u-yao ching (this addition doesn't exist in the present LV)

the big added or changed parts of the 3rd stage (these additions don't exist in the P'u-yao ching)

the changed parts of the 4th stage (these parts only exist in the Fang-kuang ta-chuang-yen ching)